

祭花鎮

雄文羽丹

鎮花祭

丹羽文雄

文藝春秋新社

鎮花祭

著者丹羽文雄、

昭和三十五年七月十日發行

發行者車谷弘

發行所文藝春秋新社

印刷所大日本印刷

製本所加藤製本

定価三百九十円

鎮

花

祭

目

次

静かな家出

七

夢心地の数日

三

コマーシャル・タレント

三

トレマガ

七

偶然のわな

三

当 惑

四

青い実

四

古風な女

四

予 惑

六

初夜の變

六

不幸な出発

七

無残と羞恥

八

留守の罪

八

パントマイム

七

初舞台

二〇

ふるさとの月

一九

煩 悩

二三

思いちがい

二九

人生哲学

二五

結晶作用

二四

動 揺

一四

なごさ

一五

女ごころ

一三

生 理

一六

不可解な風物

一七

悪 党

一八

別離の散歩

一五

妻の帰宅

二〇

温泉行	三〇九
その足で	三三
対決	三六
妹の悲しみ	三三
演出家	三四三
最初のつまずき	二四九
次のつまずき	二五
窮　　嵐	二六五
暗い家	二六九
勇気をもつということ	二六
沈黙する栄子	二六五
ある結末	二六
男と女の相違	二七
街の中	二五三

妊っていた陽子	三〇
可愛い部屋	三七
あと始末	三四
それぞれの現実	三〇
保護室	三七
山家旅館	三四四
客	三五
客との争い	三六四
疑われて	三七
川の音	三七六
異邦人	三六四
神にかこつけて	三九
二重人格者	三六
何処へ	四〇五

静かな家出

うちの中には、足のふみ場もないくらいに水晶のストックが置かれていた。陽子と通子が土間のすみにならべてある壺から、水晶の原鉱をとり出し、庭にはこぶ。水晶の原鉱は、印鑑用、数珠、水晶のこけし人形、眼鏡用などに区別されて、一昼夜、塩酸の壺にひたされる。その壺が三つ、土間のすみにあった。取り出された原鉱はそれぞれちがった形をしていて、一つ一つが、庭の片すみの、清水のながれを樋にうけた貯水槽の水で、きれいに水洗いをされる。朝の陽にてらされて、一つ一つが変った角度から、するどい清冽な光りをはなった。庭一面にしかれたむしろの上で区別されて、天日に乾はされるのである。

各商店の仕入れは、十時ごろから始められる。月に二回、東京や中央沿線や近くの都市から、商人が出向いてくる。水晶の価値がきめられる。直接注文があると、戸狩章造自身で包装して送りだす。

章造は、さきほどから、直接注文の水晶の包装をやっていた。その背後で、陽子も包装の手伝いをしているが、父がうしろ姿にみせる悲しさと、淋しさと、いかりには喉がふさがれる思いである。どちらも無言で、包装に気をうばわれているようすである。陽子の手は、機械的に動いた。はきはきと包装がされていく。が、おのれを立てぬく思いで、血が頭へ、ぐんぐんと上っていくようである。親にさからうという、もののしい感情には耐えかねる。さからうなど、生れてはじめてのことであり、すると、二十二年間、父と娘の間がどれほど平穩にすごされてきたかということが、いまさらにわかるのだった。陽子のきめ細かい顔には、一途なものがつよくあらわれている。すこし青ざめてみえるのは、そのせいだ。

「陽子は、明日、東京へいけ」

包装をつづけながら、ぼつんと章造がいった。吐き出す口調だった。収拾がつかなくなつて、自分を低うりだしたようないい方である。陽子は手をやすめて、父のうしろ姿

をみた。息をとめる。父親はきょうまでに、いうべきことはいいつくしている。あとには、もう何ものこっていない。東京へいけというのは、父の結論のようにひびいた。陽子は息をのんだ。その息が喉を下りていくとき、冷たい感覚があった。

「わしは今まで、陽子にそむかれるような育て方はしなかったつもりだ。草葉のかげで、お母さんは悲しんでいるだろう」

顔がひとりで伏せられた。が、それと気がつく、陽子は顔をあげた。大きな目をしている。瞳のなかに、水晶の清冽なかがやきに似たものがあった。顔の中では、この目が大きな特色になっている。うすい唇である。ほかにこれはといって特色はないのだが、目のために、ほかの部分が生きたてられて、美貌となっている。唇の形や、鼻の形にそれぞれの特別な美しさがあれば、これほどの美貌にはまともらなかったかも知れない。目だけを描いて、美貌を表現する方法があるが、陽子の顔がそれだった。父は、くりかえし陽子の泣きどころを衝いてくる。それに抵抗する思いで、陽子はことさら胸を張る。章造はつづけて、口を動かす。が、べつに新しいことではなかった。くりかえしいわれたことである。父は向う向きになり、包装をつづけ

ている。しかし、陽子の返事をあてにしている風もなく、くりかえしであることにも本人は気がついていない口調で、めんめん^{めんめん}と愚痴るのである。父の姿全体が、愚痴になっているようである。愚痴そのものが、この二、三日の父親になっていた。

「……陽子は、どうしてもいやだといひ張るが、先方はとてもり気なのだ。それに、人物だって、家庭の事情だつて、申分がない。この地方では指折りの旧家であり、何ひとつ欠点がないのだ。ただ、陽子のように、好きになれそうにないというだけのことで、父としてもこの縁談をことうわることが心苦しいのだ。ことわる口実があんまり薄弱すぎる。それが、困るのだ。そりゃわしにも、陽子の気持がまんざら理解できないこともない。しかし、夫婦というもののは、そんなに陽子が不安がるようなものではないのだ、結婚をしてしまえば、その内に夫婦愛も生じ、子供でも生れてごらん、この父よりも良人の方を大切にしようになる。わしは、陽子がいやく嫁いでくれることをのぞんでいるのだ。早くこの肩の荷がおろしたいのだ。わしも、もう年齢だ。孫の顔もみたくはないか」

陽子はだまっている。つぎの間の六畳に、足音がした。妹の通子がいきていたのだ。妹は足音をしのばせて、土間

の仕事場をぬけ、戸外へ出ていく気配だった。

「僅かな間だったが、陽子を東京へ出してやったことが、とりかえしのつかない手落ちだったよ」

それとこれとは別だと、ことばが喉まで出てきたが、陽子は口をじている。この縁談がまとまれば、父の商売はさらに安定するはずだった。戸狩章造は、東京でかなり手びろく印刷業をやっていた。株式組織であり、出資者と意見があわず、辞職をした。からだの弱い妻の夏代の願いをいれて、夏代の実家のある山梨の、銀本山麓にすまいをさだめた。夏代は三年後に死に、それから七年が経っている。一男二女のうち、長男の浩は、東京で学生生活をしている。章造は、義弟の田川淳吉の指導で、水晶の判別をはじめた。このごろでは板につき、商売も順調にいつている。縁談は、叔父がもちこんだものである。この話がまとまることは、この土地の人々に対しても一挙に、よそもんといった感情を払拭させることになる。それは、重大な意味をもっていた。きょうまで、戸狩一家は親しく土地の人々につきあっているとはいえず、彼らと同化していたわけではない。翌日、陽子と妹は、行李をひとつ、バスの駐車場までこんだ。村を出て、桁の高い橋をわたり、田圃道があるき、また村を抜けて、田圃道を経て、ようやくバスのおるひ

ろい道に出る。そこまで、小一里があった。

始発駅からのりこむので、列車はのんびりとしていた。行李はチケットで宅送にした。座席はあちらこちらに空いていたが、通子は見送人らしく、窓の外に立っている。陽子も発車まで中にはいつているようにともいわない。

「いまごろお父さん、うちの中をあるきまわって、怒ってるわね」

と、陽子がいった。

「これも、一種の家出にはちがいないんだわ」

「家出？」

「お父さんしたら、姉さんが家出でもしてくれなければ、恰好がつかないわ。父にそむいた娘だもの」

堂々たる家出とはいえないまでも、父の黙認の家出であった。陽子の最後の挨拶に、章造は何とも答えなかった。答えようがないわけである。陽子がいよいよ土間から出ていくときになっても、父は仕事場をはなれなかった。父は胸の中で、息がつまるほどに最後の格闘をやっていたにちがいない。勝味のない格闘である。あるいは、父親の愛情と権威を、おれの手でおしつぶすための格闘だったかも知れない。

「明日からまた淋しくなるわ。せっかく姉さんがかえって

きたのに……」姉の顔をみつめて、「あらしを呼ぶ女ってあるけれど、姉さんも、何となく周囲に波瀾をまきおこすようなひとね。風波を呼ぶ女だわ。姉さんが呼ぼうとしなくとも、ひとりで周囲に風や波が立ちさわるのだから」

「それは、どういう意味？」

「周囲が、すてておかないのよ。姉さんに対して必要以上に関心をもつからよ。そこで衝突がおこったり、まさつが生じて、平地に乱をおこすんだわ」

「こわいみたいな女ね。私、そんな女じゃないわ。今度のことだって、すこしも私の責任じゃないわ」

「東京へいって、どこへ落着く気？」

「叔母さんのところへは、いきにくいわね」

「そうでしょうね、今度の縁談には東京の叔母さんが、だれよりも大賛成だったんだから」

「公仁子さんところに、一時厄介になるつもりよ」

「いっしょに会社につとめていたお友達のところね。だけど、永くは厄介になっていられないでしょう」

「いよいよ困れば、叔母さんそこへいくわ」

妹は、姉の顔の上に未来を想像した。姉のような美しい女が生涯をいなか埋めるのは、可哀そうな気がする。が、同時に美しい顔と若さのために、これから都会に出てい

うとする姉に反感もおぼえる。姉が不幸になるような気がする。たとえ仕合わせになったところで、肉親にあたえた打撃が回収できるほどの幸福はつかめないだろう。

「ここからうちまで、三時間はかかるわね」

「うまくバスがあれば、いいんだけど」

「気の毒ね」

通子が売店へいって、ぶどう菓子をつ二つ買ってきた。窓の枠にのせた。陽子はそれをすぐ網棚にのせようとはしない。妹が両手で窓にとりついている恰好だった。

「今度の縁談ね、私よりもあんただったら、よかったと思うわ」

しかし、自分より五つ年下では早すぎる。通子は健康で、はちきれそうな顔をしているが、子供子供している。頬や小鼻や唇や顎の肉が、アンバランスにのさばっていて、縁談の対象となるようにまとまるまでには、五、六年が必要のようである。

「お父さんは、いいひとだわ。こういう場合、大抵の親なら、親の威光で娘の心をふみにじってしまうでしょう。しかも、周囲がみんな賛成している話だわ。お父さんとしても、娘の心を屈服させることは、やさしいことだったのよ。でも、それをしなかった。お父さんは激怒してるけど、娘

に最後までそれをおしつけなかったわ。いいお父さんだわ。お父さんの氣持を考えて、ほんとにすまないと思うわ。後悔したいような氣持よ。これからもずうっと、お父さんの氣持を考えて、胸をしめつけられるでしょう。いまだって、胸をしめつけられているんだもの、これから先が思いやられるわ」

発車が近づくと、客がたてこんできた。

「静かな家出ね」

と、妹が弱々しく笑う。

「そうね、ひとりも追手がないのだから」

「その代り、淳吉叔父さんも、東京の叔母さんも、お父さんも、この家出にはうんと手をふりあげているんだから……目にみえるように」

列車がゆるくカーブをきって、プラットホームがみえなくなるまで、陽子は顔を出していたが、妹も手をふっていた。丘陵地帯を、汽車はあえぐように走った。丘と丘の間に、僅かばかりの田圃がある。耕せる限りは、田畑にされているのである。この風景が二度とながめられない運命になるかも知れない。が、大して感傷はおぼえない。東京を思った。駅から三里もある山村の父のもとにいる間も、片時も、都会生活がわすれられなかったのだが、列車が刻々

に、正確に自分を東京へ近づけてくれると思うと、都会の感覚が切なく肌にくる。

——私と同年であることも、いやだった。何よりもあの顔が、いやだった。二十二歳というのに、四十すぎのような分別くさい顔をしていた。

まかりまちがえば、生涯その顔をみてくらさなければならなかったかも知れないのである。陽子は、鬼の手からたくみに身をかわして、とおくに逃げていく子供の爽快なたのしきをおぼえる。顔を運命を決定するなど、正しいことではないと十分に承知している。が、致し方はない。しかし、ああいう顔にも、たれか妻になる同性がいるのだと考えると、愉快になる。安心ができる。妹にいったことが、残酷だったと気がついた。

陽子は、車内をみまわした。

——家出娘というものは、何となく挙措動作でわかるというが……？

たれかにそんな風に見られていては、たまらない。私のは家出とはちがう。周囲の事情から、形式的に家出という形をとったにすぎない。いわば、私は家出というものをもてあそんでいるのだ。いまに、罰があたるか知れない。陽子は、いたずらっぽい眼をした。

新宿駅についた。東京は、夜になっていた。

ブラットホームで、人の流れに逆流するように陽子は立っていた。都会の騒音に七ヵ月ぶりに接した。陽子は、心細くなった。皮膚の感じが、器用に都会の感覚をうけつけてくれないようであり、生あたたかく怯えた。自分の服装が、ひどくやぼったくなっているような気がする。村では、むろん、始発駅でも十分目立つ存在だったが、七ヵ月も留守にしている間に、陽子は都会においてきぼりを食ったようである。向うのホームには、さまざまな洋装の若い女が電車をまっている。陽子の目には、そのどれもが垢抜けしでみえる。手にしているハンドバッグすら、すでに、流行おくれのような気がする。陽子のまわりが、いつか稀薄になつていた。

「陽子さア」

雑沓の騒々しさの中から、女の声がとおくからとんできた。向う側のホームに電車はいって、間もなく発車した、そのあとの動いている降車客の中から若い女の声がおこった。朝比奈公仁子が、向うのホームで手をふっている。陽子も手をあげた。すると、公仁子が階段の方を手で指した。ふたりは、ガードに向けて急ぎ足になった。歩きながら、ふたりは手をふりあった。

ガードの階段の上り口のところで、出会った。

「ごめんなさい、うちを出るのが、すこしおくれたの。大丈夫間に会うと思つてたんだけど、三日前からうちの中が、ひっくりかえる大騒ぎなのよ」

「ひっくりかえる……？」

容易ならぬ表現だった。陽子は、不吉な予感をもった。ふたりのまわりを、人々がひっきりなしに通るすぎる。邪魔な存在になった。

「とにかく、一度外へ出ましよう」

ひっくりかえるということばに、陽子はこだわった。事情が判明するまでは、ろくろく息もできないようだ。改札口を出て、ふたりはまた向きあった。

「私がお邪魔しては、いけないんじゃないか知ら」

うちの中が三日前からひっくりかえっているのを、公仁子はむしろよろこんでいる風である。朝比奈の家庭を、陽子はよく知っている。二、三度泊めてもらったこともある。両親に、公仁子、それに女中の家族であり、朝比奈は町工場をもっていた。八つか九つの部屋があり、町中に比較的ひろい庭をもち、中流家庭としては上の部に属するであろう。公仁子が陽子の手をつかんで、一ト息に何もかもしゃべろうとして、もどかしがった。その顔のどこにも、暗

いものは、感じられなかった。

「それに、今夜は、たれにも秘密にしてあるんだけど、私の冒険が発表されるのよ。九時二十分のテレビよ。あなたもまったくいいときに上京したわ、いいえ、私のために上京していただいたようなものよ」

「いったい何がおこったの」

不可解なままに、陽子は公仁子の明るい調子にひきいれられた。通勤の途中、偶然同窓生に出会い、思わず双方で熱をもった会話にわれをわすれているというようである。

このときの陽子は、家出という現実をきれいにわすれていた。妹の淋しさと、父の怒りと悲しさとあきらめとも、無縁だった。陽子は、気にすることはないのだ。内幸町のビルの二階に毎日かよっていたところとおなじく、都会風の女性にかえっている。

「兄がかえってきたのよ」

すると、大きな感動が、わがことのように陽子の顔にのぼった。瞳が生きて、潤い、まわりつくようにかがやいた。

「あきらめていた兄が、ふいにかえってきたのよ。九分どおり死んだものとあきらめていた兄が……」

陽子は、感動のあらわし方がなくて、公仁子の手をつ

よくつかんだ。その手が、またにぎりかえされた。ふたりは、力んだような顔を見合わせる。ひっくりかえっていると形容するほかに、適切な表現はなかったであろう。未帰還の朝比奈正方の写真は、いつも、朝比奈家の茶の間のなげしにかかっていた。陽子とはすでになじみになっている。会ったことはないのだが、自分もまんざら他人ではないという気がつよくした。

「だけど、そんなところに私がお世話になるのは、悪いわね」

「ううん、みんなあなたの上京を待ってるわ。電報をいただいてから、兄もあなたを待ってるわ。兄には、うんとあなたのことが吹聴してあるのよ」

夢心地の数日

いとこが帰っていくのを、朝比奈正方は玄関口におくりに出た。いとこは靴をはきおわってから、改めて正方をみあげ、

「鴨居にあたまがつかえるだろう。大きくなったものだ。」

すこし大きくなりすぎたようだね」

そばで母の栄子が、笑いながら正方を見あげる。育ちざかりの子供をひきしぶりに見て、おどろいている口調だが、正方は三十四歳になった。十四年間、肉親のたれとも会っていないのだ。その間の成長ぶりが、ひとびとをおどろかせる。

いとこがかえった直後、すりガラスの千本格子が鳴った。忘れものでもしたのかと、正方は玄関に出ると、

「ただいま」

妹の公仁子だった。

「おかえり」

妹のうしろからはいつてきた若い女の大きな眸に、正方ははっとしたような印象をうけた。その娘は初対面の正方を、じっとみた。正方の方が、目をさけたくらいである。いかにも都会の女らしく、はきはきと、ひとの顔を正視する。一度茶の間にもどった母親が、玄関にあらわれた。

「おや、陽子さん、いらっしやい」

「おばさま」

ふたりの女が親しげに挨拶をかわすのを、朝比奈正方は不思議そうにながめた。妹の報告はきいていたが、これほど都会風の女性とは思っていなかった。地方から出てきた

はずだが、すこしも地方色を身につけていないのだ。妹といっしょに内幸町のある会社につとめていたという話を出して、正方がおどろきを納得したのは、それからしばらく経ってからである。

おどろきといえば、正方はここ三、四日、おどろきつつけている。憂鬱と、苦しさの、暗い、ながい生活のことは海をわたってくる間に思いきり海に投げすてた心になっていたのだが、肉親のもとにかえったとたんに、別人になれるはずはなかったのだ。器用に現実をうけ入れることができず、そのギャップがおどろきの感情となり、本人をまごつかせている。正方の感覚では、手近な肉親の年齢を、ようやく感じとっているという程度にすぎない。叔母や伯父、いとこ、古い友達、町内の人々は、いまだに遠い、ぼんやりとした存在にしか感じられていなかった。かれらが身近な人間として感じられるようになるには、相当の日数がかかるようである。父の宗三は、みごとに白髪になっていた。七三にきれいに分けているのは、十四年前からそうであったが、父の白髪に正方はびっくりした。母の栄子は、別人のように肥っている。五尺足らずだが、十七貫はあるだろう。妹の公仁子の思い出は、小学校にはいったばかりのものであったが、二十二歳の、立派な娘に成人をしている。